

アメリカ文学のなかの三つの夫殺し

別 府 恵 子

“That was a pretty thing to do,” the white hunter said.

◆はじめに

むかし、『毒薬と老女』という映画があったと思う。虫も殺せないようなふたりの老女が身寄りのない老人をつぎつぎに砒素入りワインで毒殺する話だが、題名から受ける印象と違って、ストーリー自体はユーモラスで恐怖を感じさせる映画ではなかったと記憶する。人間感覚が麻痺するのか、最近、虚構の世界において想像を絶する猟奇的犯罪や暴力が、これでもかこれでもかと描かれる。また、現実の社会に目を向ければ、これまた事実は「小説より奇なり」とか、虚構の世界に負けじと、新手の殺人、傷害事件が発生しマスコミや世間を賑わせる。芸術が現実を映すのか、あるいは現実が虚構空間で起こる事件を真似るのか、区別するのが難しい。まさに、仮想現実が現実にすり替えられる。

1998年の一大事件は、ビル・クリントンの不倫スキャンダルが、大統領が偽証罪で上院の弾劾裁判にかけられるという政治問題に発展したこと。偽証罪（＝嘘をつくこと）は大罪だとするピューリタンの末裔たちの倫理観が未だ健在か、あるいは「真実であれ」の茶番劇かと傍観者をあきれさせた。事件の発端は、権力の座にある者（男）の社会的弱者（女）に対するセクシュアル・ハラメント。それが、大統領の弾劾問題という政治のレベル、いわば「男」の争いにすり替えられた感がある。被害者のモニカ・ルウィンスキーは一時の火遊びのために私生活を侵害された被害者だ。しかし、いまはセクシュアル・ハラメントの問題はマスコミから消えてしまっている。

話題を日本に移せば、和歌山で起こった夏祭りのカレー毒殺事件には意外な保険金目当ての傷害、殺人事件が絡んでいたことが判明。金銭欲のためにいとも簡単に砒素を使って多数の人を殺害したとされる、林真須美という女が逮捕された。先述の映画『毒薬と老女』ではないが、砒素を使った毒殺は昔からよくある事件だ。もっとも、和歌山の保険金殺人事件は、その動機の何ともさもしい強欲さが先行し、散文的で小説の題材になるような話題性に欠ける。しかし、皮肉なことに、保険金目当ての殺人事件の容疑者は、『女性学評論』の特集「女性と犯罪」に格好の題材を提供してくれたのである。すなわち、使用された毒薬が砒素であったことが、フォークナーの「エミリーへの薔薇」(1930)で起こる「殺人」を想起させてくれた。さらに、そこからアメリカ文学のなかで起こる「迷宮入りの」殺人事件、ヘミングウェイの「フランシス・マコーマーの短い幸福な生涯」(1938)でのマコーマーの死、そしてジェームズの「ド・モーヴ夫人」(1874)の結末で語られるムシュー・ド・モーヴの「自殺」へと連想が繋がったのである。三件とも妻による夫殺しという怖い話。さらに、三つの殺人は法律的には立証されない「殺人罪」である。

この小論の目的は、殺人が行われたと仮定して、その動機の解明と三つの夫殺しの意味をウィリアム・フォークナー、アーネスト・ヘミングウェイ、そしてヘンリー・ジェームズの短編作品に検証することである。

◆フォークナーの南部女性——ミス・グリアソン

ミス・グリアソンが薬屋で亜砒酸を買ったあと、「彼女は自殺するつもりだろうか」、「それが一番よいのかも知れない」(2047)と、ジェファソンの町の人々は口々に噂する。ヤンキー男に捨てられた誇り高き南部女性のとるべき道は自害しかないミス・グリアソンの運命を勝手に決めようというのである。もちろん、町の人たちにすればそれなりの理由がある。なぜなら、世紀がかわり、新しく生まれ変わった南部の町にとって、ミス・グリアソンは「義務であり、心労の種」、古い南部社会の象徴であったからだ。「ミス・エミリー・グリ

アソンが死んだとき、町じゅうの人がその葬式に出かけた。男たちは倒れた記念碑ともいふべき彼女への一種の敬愛の情から、また女たちは主として彼女の家の内部を見ようという好奇心から出かけた」(2044)としても当然のこと。そして、町の人々は、彼らの想像した「可哀想なミス・エミリー」とは別人のひとりの女「エミリー・グリアソン」と対面することになる。

その事実が白日の下に暴露されるまでの経緯が、フォークナーの「エミリーへの薔薇」の話である。1894年、黒人女はエプロンなしで通りに出てはならないという布令を出した町長のサートリス大佐が、彼女の税金を免除した日から、エミリーは町に課せられた「世襲の義務」、彼女の父親の死んだ日から始めて、永久につづく「特別あつかい」だったというのだ(2044)。フォークナーは「エミリーへの薔薇」の冒頭部で、南北戦争以前の牧歌的な南部社会が、工業化という時代の波を受けてすっかり変化した南部、ジェファソンをリアルに描いている。グリアソン家の屋敷が建てられていた通りは、かつては町が目抜き通りであった。しかし、ガレージとか棉繰り機械が侵入し、いかめしい名を持つ屋敷が取り壊されると、ミス・エミリーの家だけが取り残され、いくつかの町の「目障りのなか」の一つになっていた、という。まさに、時代に取り残された家のなかで、外の世界、変化とは没交渉にミス・エミリーは死を迎える。しかし、「エミリーへの薔薇」は、「愛と孤独」、「愛と疎外」などの項目で「アメリカ短編小説選集」に入れられる、ポーの伝統を継ぐゴシックロマンスなどではない。

『抵抗する読者』(1978)の著者、ジュディス・フェタリーは、「エミリーへの薔薇」というタイトルに注目し、作者がジェファソンの町＝家父長社会であった旧い南部の呪縛からミス・エミリー・グリアソンを解放したと、フォークナーへ賛辞——“A Rose for ‘A Rose for Emily’”——を送っているが、フェタリーの見解は正しい(Fetterley, 34-45)。「エミリーへの薔薇」は、やっと見つけた男を永久に自分のものにするために結婚初夜に亜硫酸で毒殺し、夫の死体に添い寝していた「哀れな」女の話、という単純なゴシックロマンスではない。

フォークナーは、時代の影響を受けて様変わりをする旧式然とした南部社会とその風習を、ミス・エミリーというひとりの南部女性の復讐劇をとおして脱構築したのである。

◆“A Southern Belle”

プリマスに植民地ができる以前、1607年にヴァージニア州ジェイムズ・タウンに最初のイギリス植民地が建設され、その後アメリカ南部は、北部ニューイングランドのピューリタン文化とは違った文化・経済体制で発展していった。旧大陸とは一線を期して、新しい神の国——「丘の上の町」——建設を目指した北部ニューイングランドに対して、農本主義を基礎とする南部はヨーロッパ文化の伝統を受け継ぎ、ノブレス・オブリージ（貴族に課せられた義務）を社会の基盤とした。そして、そのシンボリック的存在「南部貴婦人」という神話が、奴隷制に依存した南部貴族社会を温存するのに一役買ったのである。「南部貴婦人」というシニフィアンを課せられた南部女性には、特権と交換に厳しい社会規範が強要されたのである。南部女性に期待されたことは、結婚してプランテーションの女主人となること。プランテーションの女主人として大家族を切り盛りし奴隷を管理するという大切な役割を担わされた。「サザン・ベル」とは、少女から大人の女の間華やかな時期の白人女性を指示した。男に媚びを売っても性的に純潔であること、賢くなければならないが深い思慮は要求されない。彫像か絵画のように美しく、求婚者は多ければ多いほど、良い。南部社会の理想を具現するシンボル、広告塔の役割を担う。優雅で教養があり、美しく、美德の持ち主であること。ヴィクトリア朝の理想の女性像と似たところがある。貞淑、敬虔さ、外的権威に服従する、従順であること、南部の存在理由そのものであり、南部の繁栄と栄光のシンボルとされた（Wilson & Ferris, 1527-28）のが、南部女性だった。

ヴィクトリア朝の「家庭の天使」、アメリカ共和国の美德の女性像などが衰退した後も長く、南部では南部貴婦人という文化象徴は存続したのである。すな

わち、南部社会、経済は奴隷の労働力に依存していたので、地主階級、貴族主義を維持するために家父長制を遵守する必要があった。男性優位、上流階級制度、白人優位主義を温存、存続させるために、南部女性には南部貴婦人像というシニフィアンが課せられ、個人の自由が剝奪されていたといえよう。

◆ミス・エミリーからエミリーへ

南北戦争後、プランテーションが崩壊し、貴族社会が解体した後も気位だけは高い昔の名門家族が残ったのだ。それが、フォークナー文学ではコンプソン家であり、サートリス、メイジャー・ド・スペイン、マッキヤズリンといった家の人々だ。「エミリーの薔薇」に登場するグリアソン家は、誇り高い南部貴族のなかでもとくに名門の誇り高い家系であったと、語られる。南部女性であるエミリーの場合、彼女に求婚者が現れると、父親がグリアソン家の婿として相応しくないと、すべての求婚者を追い払ったのである。いわば、エミリーは父親にその青春と恋人を奪われ、結婚適齢期を逸してしまう。長いあいだ、ジェファソンの人々は、高慢なグリアソン親子を一枚の絵として捉えていた。彼らは、「白い服を着てすんなりしたミス・エミリーが背後にいて、その手前には、背中を彼女のほうに向けて、手に乗馬用の鞭をにぎりながら両股をぐっと開いて身構えた父親の姿が影絵として描かれており、そのふたりの姿を奥に開かれたドアのあいだからのぞける一枚の絵として、考えてきたのだった。したがって、彼女が三十になってもまだひとりであるのを知ると、町の人々は喜んだとまでゆかなくとも、いい気味だという気持ちになったという」(2046)。その父親が死んだ後、町の人々は彼女もやっと「人間らしく」なるだろうと噂しあう。

エミリーの父親の死はまた別の意味で新しい時代の到来を告げたのである。すなわち、町で歩道を舗装する工事が始まる。黒人と、驟馬と、機械と、ホームー・バロンという北部人の現場監督が、ジェファソンの町にやってくる。まもなく、ミス・エミリーがホームー・バロンと貸馬車屋からかりた黄色い車輪の馬車を栗毛のそろいの馬にひかせて、ドライブする姿が見かけられる。しか

し、人々は「グリアソン家のような家柄のものが北部人を、それも日雇い労働者なんかを、本気で相手にする気づかいはない」(2047)と噂をする。新しい時代になっても、依然としてミス・エミリーは町の「世襲の義務」としてジェファソンの町の人々の共有物でありつづける。彼女の父親の死後二年経って、ミス・エミリーと結婚するだろうと噂されたホーマー・バロンが忽然と町から姿を消してまもなく、臭気の一件が起こるが、エミリーは町中を相手に、毅然と対処して彼らを撃退する。「ご婦人に面と向かって、悪臭がするといえない」(2045)との理由で町の代表者たちは立ち去り、夜こっそりエミリーの家の周りに石灰をまいて、臭気の一部は解決される。エミリーが薬屋で亜硫酸を買った直後のことである。

そして、話は、四十年ぶりでグリアソン家に入った町の人たちがエミリーの真相を知る冒頭部に戻る。ミス・エミリーが亜硫酸を購入したのは、バロンに捨てられて自殺するためでなく、ましてネズミ退治のためでもなく、ホーマー・バロンを殺害するためであったことが判明するのだ。決して、誰も口にだしてエミリーがバロンを殺害したとは言わない。なぜなら、エミリーがネズミを殺すために毒薬を買ったという状況証拠しかないのである。エミリーの葬儀の後、グリアソン家の二階にある開かずの間に破って入った彼らが見たのは、新婚の部屋として飾られた寝室に、白骨化した男のミイラがベッドに横たわっていたという現実だ。さらに、枕には頭をおいたくぼみがあり、一筋の灰色の髪の毛がついていたとだけ、語られる(2050)。エミリーは完全犯罪を遂行して、法で罰せられることもなかったかわりに、一番過酷な刑罰を自ら課したのである。すなわち、南部女性という形骸化したシンボルにひとり閉じこめられることを拒否して男を道ずれにせざるを得ないという悲しい抵抗で、ジェファソンの人々が期待したノブレス・オブリージの裏をかいたのである。エミリーは彼女の人間性を、ひとりの女の幸福を奪った父親、家父長社会を見事に欺いたのである。決して法律で罰せられない方法で。

◆ヘミングウェイの性悪女——マーゴット・マコーマー

フォークナーのエミリーが、ひとりの女に南部貴婦人というシニフィアンを押しつけ、「幸せな結婚」を剥奪した父親と家父長社会の代表としてのホーマー・バロンを殺害したのなら、ヘミングウェイのマコーマーは、マッチョ＝強い男の世界に生きざるを得なかった、気弱なふがいない男の抵抗物語、男の女への憎悪と逆襲のドラマを描いたのがヘミングウェイの「フランシス・マコーマーの短い幸福な生涯」といえる。

二十世紀の大事件は、東西ドイツの統一とソヴィエット連邦の崩壊、冷戦の終結、民族主義の台頭と人権運動、女性解放の大きなうねりであろう。前項で述べたように、南部社会が依拠した家父長制の解体を示唆するものとして、エミリーの復讐は意義がある。一方、ヘミングウェイは、おそらく男性優位主義を信奉した最後のマッチョだったのでなかろうか。「100人の二十世紀」という朝日新聞の日曜版の特集記事があるが、そのひとりにヘミングウェイが取り上げられた（1998年8月23日）意義は、彼が二十世紀を代表するアメリカ作家という以上に、二十世紀最後の「男らしい男」、男性神話のシンボルとしてであると理解するのが妥当であろう。

ヘミングウェイの伝記は、華やかな女性遍歴で飾られている。四度結婚した相手の女性たちは自立した女性たち——資産家あるいはキャリア・ウーマン——であることが共通する特徴である。妻の財産（「君のろくでもない金」）が作家としての自分を駄目にしたとは、「キリマンジャロの雪」で、ハリーがヘレンをなじる台詞だ。自立した女性を愛したヘミングウェイではあるが、自らの男性性を主張し続け、妻との確執は避けられなかったのである。しかし、グレース・ヘミングウェイ、彼の母親ほど彼の女性親に決定的な影響を与えた女性はないと、すべての伝記作家は証言する。グレース・ヘミングウェイは音楽の才能豊かな女性で、結婚後も音楽教室を開き、その収入も医師である夫の収入より多かったという。また、キリスト教的美徳、価値観を夫や子どもたちに

強要したという。ヘミングウェイは、そうした「強い」母親が彼の父親を自殺に追いやったと信じて疑わなかった。性悪女＝ピッチと最大の侮辱を母親に吐き、その葬式にも出席しなかったという徹底ぶりだ。自由を拘束するものすべてに対する反感が人一倍強烈であったようだ。

彼の幼児体験に基づく母親像が、ヘミングウェイの描く女性像に大きな影を落としている。宗教的教訓を楯に善行、美德を教えようとする教義主義に嫌悪感を抱いていたことは、『我らの時代』の「医者と医者妻」や「兵士の帰還」の母親像に具現されている。男を社会の常識や宗教的規範でもって「良い子」に手慣らし、社会化しようとする圧力、教育、介入に対する嫌悪感がヘミングウェイの母親グレースに代表される女性に集約される。『誰がために鐘はなる』のマリアや『武器よさらば』のキャサリン・バークレーのような従順で男に都合のよい女以外の女たちは、“That bitch of a woman”と悪口暴言を浴びせられるのだ。

ヘミングウェイは、アフリカの猛獣狩りに二番目の妻、ポーリーンを同行させたし、第三番目の妻、マーサ・ゲルホーンとも一緒に狩猟旅行に出かけている。この小論のエピグラフに引用した“‘That was a pretty thing to do,’ the white hunter said.”は、マコーマーが雇ったイギリスの案内人ウィルソンが、マーゴットの撃った弾が手負いの水牛でなく、マコーマーにあたり、動転している彼女に言う台詞である。「上手いことやったじゃないか」(154)というわけだ。つまり、事故に見せかけて夫を殺害したかのような印象を読者に与えるよう意図されたナラトロジーである。

その前日に、マコーマーは狩りに雇ったアフリカ人たちの前で大失策、臆病者であることを露呈し、「ウサギのように逃げてしまった」(125)と臆面もなく告白する。その夜、夫への当てつけのようにマーゴットは、ウィルソンのテントに忍び込み職業ハンターに抱かれるのだ。マーゴットは年をとり容色が衰えたとはいえ、かつてはモデルでもあった美貌の持ち主、マコーマーは金でマーゴットを手に入れたようなものだ。彼女としても財産目当てにマコーマーと結

婚したのである。したがって、マコーマーが男を上げた以上、マーゴットの妻の座は安泰でなくなる。ウィルソンはそこを見透かして、引用の脅迫めいた発言をするのだ。馬鹿にしていたマコーマーであったが、彼が勇気を証明したことが判明し、マコーマーへの態度をあらためたウィルソンであってみれば、同性への最頂で、マーゴットに対する怒りの表現でもあろう。「短い幸福な生涯」の意味は、男として立派に勇気を証明した、男として生きた生涯を過大評価したタイトルである。それが、ヘミングウェイの「男の美学」なら、なんとも不毛な男の人生と受け止められる。

◆ヘミングウェイとジェイムズの「ド・モーヴ夫人」

ヘミングウェイは「マコーマーの短い幸福な生涯」における、マコーマーの死をめぐる謎、一体、マコーマーの死は過失か、故意に仕込まれた殺人かについて、はっきりと「作品のなかでは、証明されない謎」だと、説明する。そして、ジェイムズの『ねじの回転』を引き合いに出して、謎は謎のままの方が文学作品としてはより効果的だと述べているが、一理ある説明ではある(Mellow, 447-48)。しかし、イギリス人の案内人ウィルソンの見解も簡単には捨て難い。マーゴットが、絶好の状況を利用して故意に狙いをそらしたと、ヘミングウェイのテキストは読ませるのである。さらに、ウィルソンが「アメリカ女は世界中で一番無情でキツイ。一番残酷で、一番略奪性があり、それでいて一番魅力がある。女が容赦なくなると、男たちは柔になるか、神経がずたずたになる。それとも、自分が操縦できる男を選ぶのだろうか」(126)と考える。(“the hardest”という形容詞が使われている。)ウィルソンはマコーマー夫人に抗しがたい魅力を感じている。彼の見解はヘミングウェイの女性観を見事に表明するものだ。そしてまた、女は男の理想郷、狩りの世界、スポーツの世界への侵入者、男だけの理想郷を乱す者、つまりピッチ＝「性悪女」なのだ。

フランシス・マコーマーが男を上げ、ウィルソンからも尊敬される一人前の男になった後、夫から離婚されることを恐れてマーゴットが先手を打って彼を

殺害したという、一般的解釈は説得力あるものだ。それに、ウィルソンに、「何故、毒殺しなかったのか。イギリスでは毒殺するよ」(154)と言わせている。夫殺しは別に珍しいことでないともいうようだ。ただ、手段の上で、ヨーロッパとアメリカの文化背景の差異が指摘される。この小論では、マーゴットが夫を危めたと理解したい。状況証拠であっても、彼女には動機が十二分にある、事故を装って法律の手を逃れることは簡単なことだ。もっとも、一生ウィルソンから脅迫される覚悟は必要である。もう一つ、マーゴットの援護射撃が、夫を狙ったものである証拠がある。それは、ヘミングウェイのテキストにあるというより、文学的推理によるものである。ヘミングウェイの『プロフィール』の著者、リアン・ロスがヘミングウェイに世界文学の推薦図書を尋ねたとき、プルースト、マン、ドストエフスキー、トウェイン、メルヴィルなどの大作を列記した後、ヘンリー・ジェームズの初期の短編「ド・モーヴ夫人」を推奨しているのだ(22)。ジェームズの作品なら、もっと他にあって良いのである。この事実から推理して、ウィルソンをとおして作者が「上手くやったじゃないか」といわせたと推測できるのだ。そこで、最後に三つ目の夫殺し、ド・モーヴ夫人の場合に移りたい。

◆ジェームズの氷の女——ド・モーヴ夫人

ここに取り上げた短編にみる妻の夫殺しでも、ド・モーヴ夫人の場合が最も残酷無比、完璧な犯罪であろう。ヘミングウェイが、そのド・モーヴ夫人に敬意を払ったとしても無理はない。「アメリカ女は最も残酷で、略奪性があり、容赦しない。女が容赦しなくなればなるほど、男は柔になり、神経がずたずたになる」とは、まさに表面は柔和で、優雅で美しいド・モーヴ夫人その人である。フォークナーのエミリーにしる、ヘミングウェイのマコーマー夫人にしても、夫に対する愛情はない。この二組の夫婦の間には、愛情のかけらもないと言ってよい。エミリーの場合は、相手を無理矢理に屋敷に閉じこめるのであるし、マーゴットの場合は打算づくで結婚している。夫の方も、金でマーゴットを

買ったのであるから、双方とも良い勝負だ。しかし、ジェームズの「ド・モーヴ夫人」の場合は、最初妻に無関心であった夫が妻への情念のために自殺するという話である。フランスの墮落した貴族と結婚した純真無垢なアメリカ娘は、相手が彼女の財産目当てで結婚したことが分かっても、貞淑な妻であろうとする。徹底した容赦なきまでの純粹さ、彼女の潔癖性が夫を自殺に追いやる。つまり、改心して、彼女を狂おしいまでに愛することになった夫を拒絶しつづけ、自殺に追いやるという残酷さである。ずっと後になってド・モーヴ夫人の消息を尋ねるロングモアは、こともあろうに「あの女と知り合いだって。あの夫を殺害した恐ろしい女と」(331)と聞かされる。

「ド・モーヴ夫人」は、自分の娘が邪魔になった遊び好きの未亡人クレヴ夫人にパリの修道院に入れられた純粹無垢なアメリカ娘ユーフェミアが、修道院で知り合ったフランス貴族の娘の企みにかかる話。彼女は没落した家を再建しようと龐大な財産家のユーフェミアを放蕩児の兄と結婚させる。伝統ある貴族で、頹廢しきった良心というものを知らない「色好み」の夫(254)は、パリ近郊の別荘に妻をおいて、自分は放蕩三昧。情事の限りをつくす。夫の裏切りに気づいても「天使のように純粹無垢な」(232)ド・モーヴ夫人はアメリカ的道德に従って、忍耐強く貞潔を守る。悲しみに打ちひしがれたユーフェミアは陰気になり、ますます夫から疎まれる。彼女に同情するド・モーヴ老夫人の忠告「自分の良心に真面目に耳を傾けてはいけない」(229)は、ユーフェミアには通用しない。フランス娘は、ド・モーヴ夫人に兄が情事を重ねるのなら仕返しに浮気をせよと、フランスに美術史の研究にきているアメリカ青年を引き合わせる。さらに、ロングモアにも、ド・モーヴ夫人と情事を愉しむように画策する。ところが、容赦なきまでに貞潔なド・モーヴ夫人は、同胞のアメリカ青年、ロングモアを家から遠ざけるのだ。ド・モーヴ夫人を愛する男は彼女のためを思ってアメリカに帰国する。フランス貴族である兄妹には理解しがたいアメリカ的解決法である。やがて、夫の歴然たる不貞の証拠を発見した夫人は、良心と貞淑の観念に従って夫を拒絶するのである。

ジェイムズの小説世界では定石のストーリーの展開だが、皮肉にも放蕩者の夫が慄然として、自分を拒絶する妻の高潔さ、美しさに感動して、結婚以来始めて妻を真剣に愛するようになるのだ。そして悲劇的結末を迎えるという訳である。彼の愛は熱烈さを増し、狂おしくなるほど、拒絶しつづける妻を愛するようになるのだから、男女の関係は複雑だ。「神経がずたずた」になったド・モーヴ氏は絶望の挙げ句、ピストル自殺する。その報告を、アメリカに帰ったロングモアが、風の便りに聞くとところで、ジェイムズの短編は閉じられる。「彼はフランスで最も誇り高い男だった。その彼が、夫人に跪いて許しを請うたのだが、すべて無駄。彼女は石のようにかたく、氷のように冷たい女。彼女は怒れる美德だ」とのド・モーヴ夫人評をロングモアは聞かされる。いまま、ユーフェミアを想うロングモアは不思議な感慨に耽るのである(331)。すでにみたように、「石のようにかたい」という形容は、ヘミングウェイのテキストで“the hardest”に転用されている。

「ド・モーヴ夫人」はジェイムズのアメリカ対ヨーロッパという「国際状況」を主題にした短編のなかでも、「比較心理学的」に興味深い作品で、ヘミングウェイの関心を引いたのもうなずける。ジェイムズの『アメリカ人』(1876)においてもフランス貴族の頹廢の象徴として、ベルガード家の秘密、妻の夫殺し(毒殺)が示唆されるが、その情報をクリストファー・ニューマンは脅迫に使用せず、身を引くという、アメリカ的解決法——アメリカの純粹無垢の勝利として描かれている。しかし、「ド・モーヴ夫人」の結末は背筋に冷たいものを感じさせる絶妙の夫殺しを暗示する。

◆おわりに

ド・モーヴ夫人は美德の固まり、何もしないで夫殺しに成功したのである。ジェイムズの語り手がいうように「氷のように冷たい女」、ヘミングウェイのイギリス人ハンター、ウィルソンがいうように「アメリカ女は容赦しないのだ」。ヨーロッパ人からみれば、確かに、ピューリタンの倫理観を遵守するという点

では、ピューリタン娘の容赦なさは恐ろしい、難物と映ったに相違ない。ジェイムズはそれを見事に「ド・モーヴ夫人」で描いて見せたといえる。ヘミングウェイは、ド・モーヴ夫人が夫を自殺に追いやったとは決してっていない。しかしながら、彼は、自分の父親が銃で自殺したことを知ったとき、母親が父を自殺に追いやったと断言している。「あのビッチが」と母親に捨てぜりふを浴びせている。

三人のアメリカ作家の短編に描かれた、妻の夫殺しにいたる男と女の関係は、かなり、絶望的＝閉塞なものであることが判明した。どの場合も、ある特定の時代の社会規範の犠牲になった女／男の、抵抗の方便として、象徴的な行為としての夫殺しが、この小論で取り上げた三つの短編のテーマだと解釈したい。フォークナーのミス・グリアソンは、家父長制の犠牲になった復讐として、結婚という枠に男を閉じこめるために殺人を犯す。誇り高いエミリーは、ド・モーヴ氏のように自殺しないのだ。ヘミングウェイの場合、抑圧的存在の犠牲者が男であるのがきわめて現代的だ。そうであっても、その男性優位主義＝マッチズモの犠牲にされているのは、相変わらず女である。だが、フォークナーのエミリー同様、マーゴットは単なる犠牲者であることを拒絶して暴力に訴える。「目には目を」の論理でマコーマーに不貞を働き、そのために離婚される危険を感じると、夫を殺害してでも自分の生活の安泰を図るビッチ、性悪女に変身する。ジェイムズの純粹無垢なピューリタン娘は、完璧なまでの美德ゆえに改心した夫を死に追いやる。(アメリカ)女は「容赦しない」のである。

引用文献

Faulkner, William. "A Rose for Emily," *The Norton Anthology of American Literature*.

4th edition. New York : Norton, 1992. 引用の邦訳については、高橋正雄訳 (『世界文学全集 89』講談社、1975) を参考にした。

Fetterley, Judith. *The Resisting Reader : Feminist Approach to American Fiction*.

Bloomington : Indiana UP, 1978.

Hemingway, Ernest. "The Short Happy Life of Francis Macomber," *The Snows of*

- Kilimanjaro and Other Stories*. New York : Scribner's, 1955.
- James, Henry. "Madame de Mauves," *The New York Edition of Henry James*. Vol. 13. New York : Scribner's, 1907.
- Lynn, Kenneth S. *Hemingway*. New York : Simon and Schuster, 1987.
- Mellow, James R. *Hemingway : A Life without Consequences*. London : A John Curtis Book, 1992.
- Ross, Lillian. *Portrait of Hemingway*. London : Penguin, 1950.
- Wilson, Charles R. and Ferris, William. eds. *Encyclopedia of Southern Culture*. Chapel Hill : U of North Carolina P, 1989.

Summary

The Gentle Ways of Getting Rid of Husbands

—Three Murder Cases in American Literature

Keiko Beppu

“That was a pretty thing to do,” the white hunter said.

“Thou shalt not kill” is the first commandment and murder is the greatest sin of all the deadly sins in the Decalogue. Just the same, human history is crowned with bloody murders committed in passion, and atrocious massacres done in cold blood, in the name of the king, the country, or of love. And we secretly harbour a certain joy in witnessing murder in fiction and in film ; or we may even commit one in fantasy if not in actuality.

This short essay is an exploration on the theme of “woman and crime” as dramatized in literature. The quotation in the epigraph is taken from one of Hemingway’s African stories, “The Short Happy Life of Francis Macomber.” Whether Macomber’s death is a murder or an accident is never made clear in the story, and it is meant so to remain. Yet as the white hunter suggests or threatens the wife, the chances are she did shoot at her husband and killed him. A story of a wife murdering her husband for whatsoever reason quite appeals to any reader of fiction. Indeed, there are a few interesting cases of murder of this particular category in American fiction ; Hemingway’s Margot killing Francis Macomber is one such case ; William Faulkner’s Emily Grierson poisoning Homer Barron in

“A Rose for Emily” is another example. This time there is a murder, which however is never proved. The criminal is above and beyond the law of (old) southern community where she is confined for life, which in itself is serving a death sentence, as it were. Still another case is Henry James’s “Madame de Mauves.” The story ends in the death of the prodigal husband to whom the wife is a prisoner in marriage.

This essay explores these three deaths of the husbands : first, whether the murder *is* committed or *not* ; second, if so, why the wives murder the husbands. And it is hoped the discussion will give us a clue to the ideal way of both husband and wife saving their marriage together “till death doth them part.”